

敗戦で「よごれたしょぼたれた日の丸」に自ら起立せよ

作家の大岡昇平は「白地に赤く」という1957年の文章で、日の丸についてこう書いていた。

《テレビなんかで、一日の番組の終りで、画面一杯に、日の丸の旗が動くのを見、君が代が伴奏されるのを聞くと、いやな気がする。「逆コース」に対する憤慨なんて、高尚な感情ではない。なんともいえないみじめな気持ちに誘われるのだ。／わが家の日の丸は無論、終戦後米袋に化けた。そのうち破れて、その用をなさなくなったから、すててしまった。以来うちには日の丸はない。／日本国は再び独立し、勝手な時に日の丸を出せることになったが、僕はひそかに誓いを立てている。外国の軍隊が日本の領土上にあるかぎり、絶対に日の丸をあげないということである。／捕虜になってしまったくらいで弱い兵隊だったが、それでもこの旗の下で、戦った人間である。われわれを負かした兵隊が、そこらにちらちらしている間は、日の丸は上げない。これが元兵隊の心意気というものである。》

「日の丸」に対してこのような見方ができることに、それ以上に「元兵士」のこの見方が大変スッキリしていて納得できることに驚かされる。戦時中の日の丸は敗戦後、「米袋」以外に用途はなかった。敗戦国の国旗などなんの値打ちもなかった。《そのうち破れて、その用をなさなくなったから、すててしまった。以来うちには日の丸はない》のは、日の丸を掲げる国がない状態が続いているということだ。《外国の軍隊が日本の領土上にあるかぎり、絶対に日の丸をあげない》のは、もちろん、真に独立したとはいえない日本に日の丸を掲げることができるような国は存在していない、ということである。日本のどこででも日の丸が掲げることができないかぎり、つまり、日本に駐留する在日米軍基地にも日の丸を掲げられないかぎり、いまの日本には日の丸をあげられるはずがない。

日の丸の下で戦ってきた「元兵士」としては、かつての敵兵が《そこらにちらちらしている間は》、日の丸を上げられるはずがない、という主張は、戦争に負けた日本は戦後もまだ負けつづけているのに、そのことを見ないようにして日の丸を掲げること自体、どうかしているということだろう。

《自衛隊幹部なんかになり上った元職業軍人が神聖な日の丸の下に、アメリカ風なお仕着せの兵隊の閲兵なんてやってる光景を見ると、胸くそが悪くなる。恥知らずにも程がある。／捕虜収容所では国旗をつくるのは禁ぜられていた。帰還の日が来て、船へ乗るためタクロバンの沖へ筏でひかれて行ったら、われわれが乗るのは復員船になり下った「信濃丸」で、船尾に日の丸が下っていた。／海風でよごれたしょぼたれた日の丸だった。／私が愛する日の丸は、こういうよごれた日の丸で、「建国記念日復活促進国民大会」なんかでふり回されるおもちゃの日の丸なんか、クソ食えなのだ。》

敗戦国の国旗は復員船の船首に高らかに上げられることなく、船尾に垂れ下っているのがふさわしかった。船尾に垂れ下っていた《海風でよごれたしょぼたれた日の丸》は、敗戦国の復員兵たちの、《海風でよごれたしょぼたれた》姿を象徴していた。敗戦国の元兵隊であった自分に似合っているのは《こういうよごれた日の丸》であって、祭典などの壇上に掲げられている《おもちゃの日の丸なんか》ではないという憤りをこめた口調に接するとき、公立学校の卒業式や入学式で揉めている日の丸・君が代などは、大岡の眼には「おもちゃの日の丸」や君が代をめぐるドタバタの田舎芝居にしか見えなかっただろう。戦後何年経とうとも、戦後日本が掲げるべき日の丸は「よごれたしょぼたれた日の丸」であって、新調された「おもちゃの日の丸」なんかではなかった。

この「よごれたしょぼたれた日の丸」を洗濯して、丁寧にアイロンをかけて再び掲げることに戦後日本は全力を尽くすべきであって、その「よごれた日の丸」を目につかない物置などに押し込んだまま、よく似たデザインの日の丸を新調したところで、そんな「おもちゃの日の丸」に戦後日本の歩みを託せるはずがなかった。敗戦後の日本に掲げられているのは、「おもちゃの日の丸」であって、敗戦で「よごれたしょぼたれた日の丸」ではない。敗戦後日本が本当に掲げなければならないのは、この「よごれた日の丸」ではないのか、という大岡の断固とした口調は、日の丸・君が代論議で決定的に欠落している視点を浮かび上がらせていた。

戦後日本は目くじらを立てて「おもちゃの日の丸」に振りまわされてきたのであり、「おもちゃ」をおもちゃとわからずに弄んできた60数年だったのではないか。《捕虜収容所では国旗をつくるのは禁ぜられていた》、と大岡は言う。GHQに占領されていた敗戦直後の日本は、国家的規模での捕虜

収容所状態に等しかった。占領中のときも、《国旗をつくるのは禁ぜられていた》ののだろうか。そのとき、《国旗をつくる》必要性を感じていた日本人は何人いたか。大岡の愛する「よごれた日の丸」とは、捕虜収容所でつくることを「禁ぜられていた」日の丸であった。その「禁ぜられていた」日の丸をつくり、掲げることからしか戦後日本は始まらなかった。

大岡の『俘虜記』には、俘虜収容所で知った広島への原爆投下に関する記述がみえる。

《……戦争の悲惨は人間が不自然に死なねばならぬという一事に尽き、その死に方は問題ではない。

しかもその人間は多く戦時或いは国家が戦争準備中、喜んで恩恵を受けていたものであり、正しくいえば、すべて身から出た錆なのである。／広島市民とても私と同じ身から出た錆で死ぬのである。兵士となって以来、私はすべて自分と同じ原因によって死ぬ人間に同情を失っている。》

「死ぬも生きるも紙一重」であり、兵士として戦場に駆り出されて死ぬことになっても、それは自分の「身から出た錆」なのであるから、同じ「身から出た錆」として広島市民の原爆死も自分の死と同等にみなす、つまり、自分の戦死を自分が受け入れざるをえないように、広島市民も自分たちの原爆死を自分たちが受け入れざるをえないだろう、ということである。戦争とはそういうことであり、戦争に加担するということは自分の戦死をも受け入れざるをえない、ということなのだ。『レイテ戦記』で神風特攻に触れた個所からも、同じ声が聞こえてくる。

《しかしこれらの障害にも拘らず、出撃数フィリピンで400以上、沖縄1,900以上の中で、命中フィリピンで111、沖縄で133、ほかにほぼ同数の至近突入があったことは、われわれの誇りでなければならない。／想像を絶する精神的苦痛と動揺を乗り越えて目標に達した人間が、われわれの中にいたのである。これは当時の指導者の愚劣と腐敗とはなんの関係もないことである。今日では全く消滅してしまった強い意志が、あの荒廃の中から生れる余地があったことが、われわれの希望でなければならない。》

特攻兵士も原爆死の広島市民と同様、自分と同じ「身から出た錆」の死者と捉えられており、そこでの戦死になんの差別もない。あくまでも自分と同じ兵士として特攻兵士たちをみていけば、荒廃した戦場の中で「強い意志」がくっきりと際立っているのが見え、そこに自分たちの戦場ではありえなかった「誇り」と「希望」を見出していたのだ。特攻兵士の特攻に《今日では全く消滅してしまった強い意志》を認めるそこには、同じ兵士としての共感がなければならない。その共感の中からしか彼らの「強い意志」は迫り上ってこない。大岡に彼らの「強い意志」がみえて、他の者にみえなかったのは、その共感の有無であった。共感は大岡が立っている戦場から自然に湧き起こってくる。大岡は戦場に立って、あらゆる戦死について「身から出た錆」と言い切り、特攻兵士に誇るべき、希望とすべき「強い意志」を見出していたのだ。

レイテ島の戦いの記録を書き終わった時に感じたのは、「結局一番ひどい目に会ったのは、フィリピン人ではないか」ということだった。「身から出た錆」の日本兵士の死者と、「身から出た錆」とはけっしていえないフィリピン人の死者とが対比されて大きく浮かび上がってくるのだ。『レイテ戦記』を上梓したばかりの71年11月に、大岡は芸術院会員を辞退するが、その理由として、「私の経歴には、戦時中捕虜になったという恥ずべき汚点があります。当時、国は“戦え”“捕虜にはなるな”といていたんですから。そんな私が芸術院会員になって国からお金をもらったり、天皇の前に出るなど、耻しくて出来ますか。」（中国新聞71年11月28日付）と談話しており、レイテ島の戦場をいまでも歩きまわっているような大岡に、芸術院会員など「おもちゃ」に等しかった。「戦時中捕虜になったという恥ずべき汚点」については、戦後日本は戦時中の捕虜に対する取扱いを依然撤回しておらず、自分はまだ捕虜状態であることと同時に、敗戦―占領によって日本人全員が捕虜状態であったことや、その捕虜状態は戦後も引き続いていることを、国にむかって突きつけていたのである。

大岡は戦場から戦後日本に帰還したのではなく、戦場に立ちつきたまま帰還したかのように見え、彼の「戦場の目」には敗戦で「よごれたしょぼたれた日の丸」しか映らなかったし、特攻兵士たちは驚異的な「強い意志」で輝く希望にほかならなかった。式典に「おもちゃの日の丸」しか見出せない「クソ食え」は当然、芸術院会員にも向けられていたのだ。《26年前、私が一兵卒として前線に行き、死と顔を突合わせて帰って来たということが、決定的なことだったらしいのである。安らかな老後を求める気持は、私にはない。働き続け、苦しみ続けて死ぬつもりである。》（「六十三、四の正月」1972年1月）と大岡は書いている。